

張文環小説における新女性像に見られる人物 造詣の特殊性

北見吉弘 *

摘要

張文環は台湾の日本統治期間において活躍した台湾人作家である。その主な作家活動では、処女作「落蕾」を起点に発表された青年知識人の生活を描いた小説作品が代表作の一つとして知られる。今回筆者が着目したのはそれら作品の主要人物として登場する新女性像に施された特殊な造詣に於いてである。張文環の描いた新女性像に関する関連の先行研究ではそれら人物像の人生や思想性が既に論じられてきたが、人物像を統括してその特殊性を解釈し、かつ発展論的に論じたもの今のところ見られない。

キーワード: 張文環、新女性、インテリ、台湾文學

* 育達商業科技大学応用日本語学科助理教授

Specialty of the New Woman Characters in Zang Wenhuan's Novel Works

Yoshihiro Kitami *

Abstract

Zhang Wenhuan is the writer who played an active part in the literature activity in Taiwan during a period of the colonial rule by Japan. About his main writer activity, including his maiden work "Bud Drooping", the creation of his novel works are recognized as the work which described the life of the young intellectuals in those days. What this article mainly searched was to show the aspect of the specialties about the description of his new woman characters. As for the related precedent study, mainly discusses the characteristics of the life or thought. Other words there are quite a few interpreted the characters specialty and the state of development.

Keywords:Zhang Wenhuan, new woman, Intellectual, Taiwanese literature

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University

張文環在小說作品塑造出來的新女性形像之特殊性

北見吉弘 *

摘要

張文環是台灣日治時期活躍的台灣人作家。其主要的作家活動從處女作「落蕾」開始，發表的一系列描寫青年知識份子的生活及內心的小說作品為其代表作而廣為人知。在此，筆者所著眼的便是其中所描寫新女性形像之所以跟當時一般新女性不同的人物塑造上的特殊情形。關於張文環所描繪的新女性形像已有諸多的先行研究對其作討論，雖然對於其人物形像的思想及生活方式頗有已論述終結之感，但大致上還沒有具體研究針對張文環新女性形像所塑造上的特殊性及其發展情形。

關鍵字：張文環、知識分子、小說、台灣文學

* 育達商業科技大學應用日語系助理教授

1、序

張文環(1909-1978)の「落蕾」、「父の要求」、「頓悟」、「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」などは、いずれも1920年代から30年代、そして戦争開始間もない頃を時代背景に、地方出身の青年男性を主人公にした小説作品である。これら人物は主に小学校入学以前の段階から公学校(小学校)就学までの少年人物から、中学、高等学校などでの就学期間における学生、そして日本での留学期間及び大学卒業後のインテリといったいずれかの人物設定に属するもので、作者自身の経験や体験が題材となっているため、作者の分身として思想性や感情面など内面性描写における一貫性が持たれている。ただし、同時にそれら人物像はかなりの程度において作者の個人的な人生経験を題材にし、かつ、それに伴う主観性を濃厚に含んでいることで、俗世間一般の台湾人青年とは異なる存在となっていることを理解する必要がある。いっぽう、これら男性知識人主人公の登場する作品には多くヒロイン的な存在として新女性像が設けられており、また、主人公である男性側と同様に、それぞれ新女性における人物造詣も極めて特殊なものとなっている。これら新女性像の主な特徴では、まず第一点としてこれら新女性像は他の女性像に比べいずれも男性主人公の目線から描かれたことで、常に恋愛や結婚の対象として意識する作者の個人的、主観的な愛憎の情が強く感じられることである。そして第二点としては、男性主人公の成長と歩調を合わせたかたちで男性主人公が幼少時の設定の場合はその幼馴染、公学校時代でのクラスメートとして、男性主人公の学生時代においては恋人として、そして、男性主人公の日本留学後の社会人の設定の場合ではすでに他家に嫁いだ人妻の設定となっており、男性主人公同様に一人の人物の人格を中心に描かれ続けた要素が強く、また、その性格面や思想性に一貫性が見られることである。即ち、作者にとってのこれら新女性は極めて特別な女性的存在であり、このことが要因となりその人物造詣において当時の新女性一般とは異なった特殊な造詣がもたらされているのである。

要するに、多くその小説作品に地方社会出身の台湾人の新女性像を描き続けた張文環であるが、今回筆者の研究対象とする新女性像に関しては、それを作品が時代背景とする頃における一般的、客観的な存在としての新女性ではなく、あくまでも作者の個人的な異性憧憬の対象たる限定された女性として見るべきである。

こうした張文環の新女性描写に対する傾向を鑑み、今回は張文環小説に登場した

関連ある新女性像を中心に、その人物造詣上の分析を試みた次第である。なお、作者が自身の実生活において実際に関わったと想定される実在のモデル的存在の考証においては、客観的資料の不十分な現状より¹、今回の論文では論及していないことをご了承願いたい。今回の筆者の研究は張文環小説における新女性像に関するものであるが、先行研究に関しては主にそれら新女性像の思想性、価値観、生活の様子、そして生き方などを論じたものが往々に見られるものの²、今回の筆者の論文の如くそれら関連する新女性たる人物像を一括し、造詣上の特殊性に論点を置いた上で、各人物像に共通した特徴を論じた研究は現在のところ見られない。

2. 性格描写に関して

まず、張文環の処女作「落蕾」(1933年7月15日発表)に始まり、「山茶花」(連載小説1940年1月23日～5月14日)までの戦前に発表された作品に関して論を進めたい。³

2.1. 新女性の少女時代における描写

作者が自己の体験を素材にその少年時代を描いた「論語と鶏」、「夜猿」、「山茶花」

-
- ¹ 以下は柳書琴著「張文環『山茶花』解説一部落から都会へ、進退窮まった植民地の青年達」からの引用である。「小梅公学校には高等女学校を卒業した女性教師がおり、彼を招いて宿舎で話をしたりしたと言う。他にも彼は従姉妹の美しい娘たちと多くのロマンスがあったと言われる。公学校期に思春期を迎えた張文環は、中学校に進学後、故郷の女性達との愛情に果たして進展があったのだろうか。岡山に行つて後休暇に故郷に帰った彼は、大人になった昔の娘達と接触したのだろうか。いずれも今となっては解らない。」(『台湾長編小説集二』所収、p.369)
- ² 先行研究に関して：張文環は適齢期から結婚間もない女性像を多く描いた作者であり、そのうちの人物像の一つが新女性である。ただし、これら新女性は主に地方社会出身者であり、生活のありかたは中国の伝統的な要素を濃厚にする。最近の研究で主に関連性のあるものは以下の通りとなる。許惠玟「張文環小説的女性形象分析」、『台湾文藝雜誌』166、167期合刊本、1992。吳麗櫻「張文環小説中女性題材之研究」(中興大学中國文學研究所 在職班 碩士論文)、2004。津留信代「張文環作品裡的女性觀—日本舊殖民地下的臺灣」、『中國文學評論』復刊第1號、1993。張文薰「由『現代』觀想『故郷』—張文環<山茶花> 作為文本的可能」、『台灣文學研究學報第二號』、2006。丁鳳珍「台灣日坵時期短篇小說中的女性角色」(成功大学中國文學研究所碩士論文)、1996。蔡瑩慧、「張文環の『山茶花』に見られる女性像—従順と抵抗のはざまに—」、『銘傳大學應用日語系碩士論文』、2008。陳英仕「張文環『山茶花』析論」、『臺北文獻』179、2012。上記の研究を見ても多くの研究者の張文環小説における女性人物への関心の高さが理解できる。また、筆者による研究は以下の通りとなる。「張文環小説における女性人物に対する比喩表現」、『真理大學人文學報』第十期、2011。「張文環小説における古典的女性」、『育達人文社會學報』第七期、2011。「張文環小説に登場する女性の結婚相手に関して」、『世新日本語文研究』第三期 2011。
- ³ 張文環の小説作品の多くが、1933年から1944年における発表である(今回の研究ではこれを“作家活動期”としている)。今回の研究範囲では、その後、1972年に執筆が始められ1975年に発表された長編『地に這うもの』が含まれる。なお本論文では作品を示す際、多くが短編集や雑誌に収められた一篇であるため「」が用いられているが、一冊の著作として出版された『山茶花』と『地に這うもの』も方便上、それぞれ『』は用いずに、「」を以て記すことにした。

等の作品は作者が少年時代から青年時代にかけて書房や私塾で勉学に励んでいた少年時代、そして公学校時代を経て、高校時代、そして日本での大学留学開始までの期間を題材とする。その際における新女性像はいずれも同年齢かそれに近い登場となり、作品の発表順では「論語と鶏」嬋、「夜猿」阿美、「頓悟」阿蘭が主な人物となる。

まず、「論語と鶏」は男性主人公(源)の部落での書房に学ぶ様子を描いた作品である。⁴以下は、男性主人公の目線によるヒロイン嬋に対する性格描写の様相である。

嬋はまた源がいやに大人つぼく見せるものだと思つて、自分のまだ娘々とした態度で源にいろんなことをいひつけたりした。(中略)「源、あたいあなたのお嫁さんになるのよ。」或るとき、花嫁のまゝごとに誘はれて、源は不安な気持ちで胸をどきまきさせながら嬋の後ろに従って歩いた。先生が見てみはしないかとあたりに氣を配つたが、嬋はかまはずに源の手を引つ張つて急ぎ出した。(中略)こんなに我が儘な嬋と、きびしい先生との父娘のあひだの生活を源はいつもふしぎに思ふのだつた。⁵

嬋の男子を相手とする奔放さと大胆さは、後に新女性の娘時代を描いた「山茶花」娟、「地方生活」淑らに引き継がれているものである。また、描写の目線が作者の分身である男性主人公に置かれ、女性人物が男性の思春期における異性憧憬の対象となっていることにも留意されたい。

続いて、「論語と鶏」の後の発表となる「頓悟」における人物造詣の様子を見てみたい。以下の引用は阿蘭の「七歳」の段階に対する、少年時代の主人公(為徳)の目線からの描写である。

晴着を着、轎に乗つたせぬか。おしやまな阿蘭はひどくすましてゐた。私は他の子供達と一緒になつて、阿蘭の家の戸口に立ち並んでそれに見惚れてゐた。見てゐるうち、なかの一人が阿蘭がお嫁さんに行くんだい、と冷やかしたので、阿蘭は忽ち眉を逆立て、ぺつと私達に向かつてつばを吐いた。⁶

⁴ 中島利郎は「張文環作品解説」において「日本と統治期の台湾山間部における書房(児童のための伝統的学習塾)の凋落する様子が作者の分身たる人物が源という少年の眼を通して批判的に描かれている」と論じている。(『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』所収、p.337)

⁵ 張文環「論語と鶏」、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、東京、緑蔭書房、1999.7.20、一版、p.167。

⁶ 張文環「頓悟」、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、p.225。

阿蘭の性格面における勝気の強さや男勝りであるという特徴は前述した人物と共通しており、それぞれ出生や家庭環境などが異なるが、作者は同一の人格を意識して描いたものと考えられる。以下、引き続き「山茶花」のヒロイン娟の少女時代(公学校就学時)の様子を見てみたい。この作品での初めの部分では娟が公学校就学段階が描かれ、新たに新教育を施された近代的な知識人たる要素が加味されている。以下は幼馴染として登場する男性主人公(賢、少年時代)の目線による描写である。

娟はいやにこざかしいきざな娘だと思つた。しかし子供達の人気を獲得するには娟を無視することもできない。一体に娟は賢の目から見れば憎らしさうな子である。彼女にはまるで世の中には恐いものがないやうに男の子の頬つぺたでも平気で撲ぐるのである。公学校へ入学した勿々まで第一学期も終らないと云ふのに、先生は娟を級長にしようと云ふので賢は娟を嫌ふやうになつた、むろん娟の勉強の偉さは好意がもてるが、優しみのない女の子はこれも化け物のやうで嫌ひだつた。⁷

作者の描いた新女性像に共通するのは、新思想受容の場となる公学校における就学経験を有することである。前述の如く男性主人公(賢)は少年期や青年期を台湾の地方社会で過ごした作者本人の分身的要素を持つことから、関連する新女性像はその異性憧憬の対象となり、人物造詣における理想化がより強まっているのが見られる。

2.2. 学校教育を背景とする新女性に関する描写

「論語と鶏」、「頓悟」、「山茶花」における新女性の少女像に示された如く、作者はその造詣に対して近代的、都会的、かつ反伝統的な性格描写を施している。少女時代におけるヒロインの性格は、公学校就学後の結婚適齢期にある娘として登場する「落蕾」秀英、「山茶花」娟(娘時代)、「地方生活」淑、「地を這うもの」阿蘭などに受け継がれ、男性主人公のヒロインへの思いは初恋から恋愛願望の実現へと発展する。

「落蕾」は新女性が描かれた最初の作品であり、ヒロイン秀英は公学校卒業の中流階級(あるいはそれ以下)の娘である。作者の分身である男性主人公(義山)と恋人関係の人物設定を通じ、秀英は当時新女性の間で話題だった異性との自由恋愛を敢え

⁷ 張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京:緑蔭書房、1999.7.20、一版、p.41。

て実践する反伝統的な女性として描かれ、その性格面における特殊性が感じられる。続く「山茶花」の段階におけるヒロインとして娟は、「落蕾」秀英に比べ、その反伝統的な精神面がより強く徹底したかたちで描かれている。この「山茶花」娟に対する性格描写に対し、作者は伝統的な女性として登場する姉との性格面における比較を通じ、その反伝統的な様相をより具体化した。以下は両者の性格描写に関連する引用である。

弱い姉の気性にくらべて自分は強くて我儘にもかんじられた。姉は迫害をうける花のやうに可哀想でならなかつた。(中略)そこへ行くと自分はたくみに世のなかをくゞつて行けるやうな気がして仕合せに思ふのであつた。自分は大胆で決断力があるからだ。だから自分は姉を譲らなければならぬと思つた。(中略)もし姉を撲ぐる男がゐたら、自分はその男の出鼻をモチのやうに喰ひついていつてやる。若し悪漢におそはれたら、自分はその悪漢の横腹に短刀を突込んでやる。⁸

引用における娟に対する性格面の描写には、作者の男尊女卑を容認する封建社会への批判が示されている。ただし、ここには当時の新女性が望んだ婦女解放や女性自立も意識されていると思われるが、それよりも男性主人公の立場にあった作者の女性に対する脱封建の願望がより強く感じられる。

2.3.結婚適齢期における新女性に関する描写

長篇連載小説「山茶花」の執筆期間の発表である短篇「地方生活」では、女性側における縁談、そして男性側における日本留学を境に、作者のこれまでの新女性をヒロインとする人物造詣の見解の変転が伺える。それまで執拗に描かれた新女性に対する異性憧憬は影をひそめ、新たに登場した新女性像たる「地方生活」淑に対しての性格描写にはかつて執拗に描かれた男性の異性憧憬に合致すべき要素は見られない。この「地方生活」淑の出身が中流家庭という点では「落蕾」秀英、「頓悟」阿蘭、「山茶花」娟らと同じだが、最終学歴が女学校卒業であるという新たな設定は「二人の花嫁」阿嬌や同作品の「地方生活」「某美術研究所の女留学生」の如く、作者が新女性の有する虚栄心、利己心、個人主義的な側面における性格描写を意図したからに他ならない。また、淑と相反する価値観を持つ人物として描かれた古典的女性の婉仔である

⁸ 同注7、p.66。

が、これが淑の“姉”とされた人物設定は、まさに「山茶花」における錦雲と娟の関係の再現であり、同様にこの「地方生活」が新・旧女性の比較による性格面や価値観の違いの提示を意図したことは明白である。以下は作品「地方生活」からの引用である。

（婉仔は）も物心つく頃から、澤の嫁にあると云はれてゐるので、特別王家には親しみを持つてゐるが、本能的に思慮ぶかく、引込みがちで大胆に振るまはれなかつた。しかし淑は、王同年嬢さんの娘とも同じなので、駄々をこねたり、強んたりするような我儘な娘であつた。⁹

一生苦勞の多い自分の生涯を思へば、婉仔のやうな繊細な娘には氣の毒でならなかつた。むしろ淑のやうな娘の方が苦勞に堪え得るやうにも見えるが、しかしかう云ふ現代的な女は案外精神力の乏しいことが澤は知つてゐた。健康な體に似はず、享樂を貪ぶりたい性格を澤は恐れてゐた。¹⁰

二つの引用はいずれも主人公（澤）の視点からなされたヒロインに対する観察である。淑の反封建的かつ個人主義的な思想性は「山茶花」娟から引き継がれたものであるが、その性格描写においては往来の女性像の少女時代における天真爛漫な理想性が薄れ、終始にわたり利己的、打算的、反道徳的、現実主義的といった反伝統的側面のみが強調されている。実はこのような人物造詣の傾向は「地方生活」と執筆期間を同じくする連載小説「山茶花」の終盤段階におけるヒロイン娟の娘時代にも見られ、物語が結末に近づくと、主人公（賢）の日本（東京）の大学留学とヒロイン娟への縁談話の提起を境に、かつての「落蕾」と同様、作者の新女性に対する性格描写は極めて厳格で批判的なものへと移る。以下は関連箇所からの引用である。

このごろ娟が素直に見えるのは、ずるくなつたせみだと姉はかんじるやうになつた。彼女の思つてゐることはやつぱり我儘なことばかりであつた。しかし今までのやうに一本調子ではなく、うまく人の隙を狙つて自分の感情を押し出していくやうであつた。人間の感情が人間の感情の陰をつたつて歩く巧妙さには錦雲はあきれて了ふのである。もし娟が男であつたら姉は妹を末恐ろしい姿に思はれて仕方なかつた。¹¹

⁹ 張文環「地方生活」、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、p.279。

¹⁰ 同注9、p.291。

¹¹ 同注9、p.291。

引用にある娟に対する性格描写を見ても明らかなように、適齡期の娘になり縁談や結婚を意識する段階に至った娟の内面性は「地方生活」淑と一致する。話をもとにもどすが、「地方生活」淑の場合においては、往來の新女性像における同類の性格面描写は継承されながらも、その性格面の大胆さがもたらす利己的、打算的な反面性のみが際立つかたちとなっている。また、淑の対比として描かれた伝統的女性である婉仔にしても、「止腹為婚」¹²の恩恵により伝統的教養を備えた人物として描かれ、「山茶花」娟の比較対照として設けられた姉の錦雲よりも一層の理想化が施され、現代的と伝統的の対立が極めて濃厚となっている。¹³だが、このことは淑が世間一般の新女性の典型であることを意味するわけでもなく、あくまでも作者の主観性を濃厚とする意味での限定された新女性像として考えられ、また、その特殊な性格による反伝統的な反骨精神の様相から判断し、依然と作者の新女性造詣に託された理想的概念の要素が感じられるのである。詳細に関しては後で論じたい。

3. 生活面における特殊性

3.1. 知的側面をめぐる

まず、作者が新女性の生き方の中心に添えたのが封建制度の束縛からの解放である。と言うのも、作者が描いた新女性像が地方社会出身者に限定されていることから、それら反伝統的な価値観を持つ新女性像は知識人として発展する上で困難な現状に

¹² 作者の作品「芸姐の家」、「地に這うもの」に描かれた如く、媳婦仔は往々に金儲けの手段として利用されがちだったことは作者の認めることであり(1943年の雑文「老娼撲滅論」ならびに短篇「媳婦」p.312を参考)、また、作者の作品に登場する「部落の惨劇」の淑花、「媳婦」の阿蘭、「地に這うもの」の秀英ら内面描写に示されている如く、これら媳婦仔たる女性は引込み思案、卑屈であり、かつ過度に内向的であるといった性格面における歪みを持ちがちな人物造詣となっている。だが、「地方生活」婉仔の媳婦仔としての処遇は「止腹為婚」(p.277)という親交の深い家柄どうしの取り決めの一つの縁組によるものであり、幼くして実家と婚家の双方から重宝され、結婚後の安泰で平穏な生活が約束されたことから、作者はこの婉仔が健全な性格を育むものとみなし、伝統的な女性知識人(古典的女性)たる理性的、知性的な人物に設定している。

¹³ まず、淑と婉仔が姉妹関係にあり中流階級(或いはそれ以下)の出身者であることに注目されたい。とりわけ淑の場合は女学校進学となっているが、実際、当時の台湾では女学校進学が望める娘はあくまで貴族や特権階級出身者に限られ、淑の如き一般家庭の女性は姉の婉仔の如く公学校就学さえ許されなかった。作者もこの件に関しては十分承知していたと思われ、作者は淑の公学校入学があくまで偶然的なものに過ぎないこと、更に女性の学校教育に否定的な家長の価値観さえも作品に詳細に示している。いっぽう、婉仔に適用された「止腹為婚」の伝統習慣においては、筆者から見れば、それが媳婦仔のやり取りの理想であることは示されても、それが直接的に貴族女性特有の読書人としての教養と氣質を体得した要因に繋がることに関する説明はなしていない。即ち、作者の人物造詣の意図は人物像に関する現実性や実在性よりも、その極端な性格描写の比較にあったと思われる。

置かれていたからである。その際、作者が新女性に対して期待したのが教育を通じて獲得した新思想を実践に移すべく、過酷な現状に対処するための意志と精神性の強さであった。「山茶花」娟は作品における登場が少女時代から娘時代に跨っていることで、少女時代、そして娘時代における新女性像の性格面の特長と変化が示された唯一の新女性像である。作者は「山茶花」娟の公学校就学後のすでに娘に成長した段階における娟の性格を以下のように描写している。

しかし娟は實に物靜かに物を觀察し、そしてふかく考へてから物を言ふのである。何んだか娟は先天的に教育をうけてきた娘のやうに、かしこいばかりでなく、高尚な稚氣のある花のやうに、娟の體全体から香ばしいかほりが匂ふやうに娟の姿がすがすがしく見えて、賢は心のなかで可愛い妹と叫びつづけてゐた。¹⁴

ヒロインの少女時代における男勝りな性格に関しては前述した如くであるが、引用では、それが娘へと成長し、公学校就学を通じた知的側面が強調されているのが分かる。更に、作者が「先天的に教育をうけてきた娘のやうに、かしこい…」と論じている如く、基本的には新教育を受ける前提としては作者の新女性像特有の性格が要となる。作者の新女性をして知的で成績優秀であるとする人物造型の傾向に関しては、「落蕾」秀英の場合では「文学少女」として優れた文才を有する少女として描かれ、「山茶花」娟に至るとクラスで一番、二番を争うほどの成績を収め、担任から級長を任されるほどの聡明な女性となり、「地方生活」淑の場合になると女学校入学を実現した女性として、更に「地に這うもの」阿蘭の場合でも公学校での成績が全校で一、二を争うほど優秀で、かつ「小野小町」に喩えられる美女として描かれている。また、何よりもこれら女性が共に大胆で男勝りな性格を有することことに関連し、新女性像に見られる特殊な性格描写には、現代的なインテリ女性としての特出した資質が加えられているのである。以下は作者が娟をして新時代の知識人、その姉をして伝統的知識人とみなした箇所を引用したものである。

姉は古典的で可憐に見えるが妹は我武者羅で男の子見たいだと母は思つた。（中略）母の一ばん恨んでゐるのは家の生活が思ふやうにならないことである。若し家が裕福であれば姉娘はお姫様であるし、妹娘は女の先生である。¹⁵

¹⁴ 同注7、p.258。

¹⁵ 同注7、p.46。

娟の場合は、生き方、価値観、性格面の全てにおいて姉の錦雲と相対的な存在に位置づけられ、娟の母親が将来「学校の先生」になる娘だと述べている如く、作者は新時代における女性知識人としての可能性を意識しており、具体的には同作品に登場する都会出身で教養豊かな“女の先生”が該当する。¹⁶さらに同様の例としては「地に這うもの」に登場した阿蘭が挙げられ、性格面においては少女時代における男の子に交じて「でんぐり返し」「逆立ち」をする様子から「活発」、「無鉄砲」、「完全無欠」な性格面における反伝統的な様子が示され、また、公学校入学後は「成績が全校一」¹⁷で校長から官立女学校受験を薦められたこと、更に本人の将来の希望が「女の先生になって、ピアノを引きながら、子供を教え(ること)」¹⁸とある造詣から、教養、素養において娟との共通点が見られる。そして「地方生活」淑の場合、それが庶民出身でありながら当時、貴族階級(資本家階級、特権階級)の女性の特権の象徴であった女学校進学を実現し、医学専門学校の学生(「医者の子」)¹⁹との自分の理想とする結婚を自己実現したが、一般の新女性には極めて実現困難なことである。言い換えれば、この「地方生活」淑はまさに貴族階級出身で豊かな教養を受けた女性知識人とほぼ同じ位地に登りつめたことを意味する。ここで言う貴族階級出身の女性知識人とは、例えば「山茶花」嬋が挙げられ、この嬋は同じく地方社会出身者でありながら、父親が村の有力者であり、かつ恵まれた裕福な環境に育ったことから、女学校進学を実現し、卒業後には公学校教師となり、最後は金持ちの公学校訓導の男性と結婚した女性である。

作者の小説世界においては男性知識人の理想は高学歴と資格取得を手段とする医

¹⁶ 娟が将来的に高学歴を得て学校教師となることを意図していたことは十分に考えられる。以下は関連箇所を引用したものである。「娟は大学生と東京へ行く女の先生の境遇がむしろ羨ましかった。(中略)女の先生が云ふには、東京の娘は、女中までして、女子大学を出てゐる。娟は先生に女中の仕事を見つけてもらへないだろうか。とにかく一人でさはないで、姉を譲らう。姉が行つてしまへば自分は自由な身になるのだ」(「山茶花」p.66)。

¹⁷ 張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、1975年9月15日一版、p.299。

¹⁸ 同注17、p.304。

¹⁹ 作者の作品において女性の理想的結婚相手として挙げられるのが医者、弁護士、公学校訓導の三者である。ただし、作者の作品に於いてこれら身分の男性との結婚を実現した人物は「地方生活」淑以外ではやはり同様に高学歴を取得した「山茶花」嬋と“女の先生”の二者だけである。また嬋と“女の先生”は共に作者の作品における女性知識人の典型となる公学校教師の身分を有する。

者、弁護士、公学校の訓導、役人が主であり²⁰、これに対し女性の場合は高等教育を受けた公学校の先生、ピアノの先生などの教育者であった。即ち、「地方生活」淑の結婚相手が医者であることは、男女双方の身分的條件の釣り合いを意味しているのである。

3.2. 自由恋愛をめぐり

作者の描いた新女性像とは例えば娟の如く「先天的」な特殊な性格を有するもので、同時に自己の信念や理論を実践に移せる人材に特定される。と言うのも、実際に当時の台湾地方社会では儒教伝統の束縛を被り、一般女性の教育は制限されたからである。作品「落蕾」には新教育を受けた男女の抑圧された様子が論じられ、主に伝統社会からの阻害や罰則を恐れ、自己の理想を追求する若者が存在しなかった様子が伺える。作者が台湾地方社会の女性に対して憂慮したのは、それら女性の不合理な現状への妥協、そして外的抑圧に耐え忍ぶだけの没個性的な生き方である。作者の多くの新女性像の懐く理想実現には相応のリスクが伴われるものであり、理想実現に失敗した秀英や娟の物語における結末は悲壮で無残なものとなっている。だが、作者の小説世界においては同時に儒教の婦徳観念に則り従順さと無抵抗主義を貫き不条理な運命に甘んじ不幸になった伝統的女性が多く描かれている様子から判断し、秀英、娟ら反社会的な行為や生き方は必ずしも否定されるべきものではない。

新女性像が取った具体的な行為は主に二つに分けられ、一つは「落蕾」、「父の要求」から「山茶花」までに示された自由恋愛の実現であり、もう一つは「地方生活」と「土の匂ひ」に描かれた女性が尊厳を得て生活基盤を獲得するために犯した儒教勢力側との全面的な対立である。いずれも儒教により支配された社会環境における反伝統的、反道徳的な行為を伴いがちとなり、封建制度の抑圧に対処すべく、これら新女性

²⁰ 以前の中国では庶民出身の唯一の立身出世が科挙試験合格による官吏登用であった。その構図は作者の青年時代である台湾社会においては進学を主とする高学歴取得と資格試験合格へと変わる。「山茶花」において「母の云ふ立身出世は多分昔と同じやうに、男は先づ秀才の試験に通り、せめて県主くらゐ出世してもらはねばならない」（「山茶花」p.247）とあるのは、庶民階級の親が息子に示したところの立身出世の願望の一例であり、またその父母が望むのが弁護士、訓導、医者になるべく高学歴取得と資格試験合格である。「山茶花」の主人公が村で初めての高校生となった際、専攻が「医専」でなく「文学」であり、また「弁護士」になれる見込みも無いことで作品には「親類達も大して喜ばなかつた」（「山茶花」p.241）様子が描かれているが、このことは当時の世間一般がみなす男性知識人の出世コースが医者、弁護士、役人、教師などの身分になることを意味している。ただし、この価値観は多くが親から継承すべき生活手段としての資産のない無産家階級に属するものであり、それら庶民出身の男性知識人が脳裏に描く立身出世とは生活と収入の安定した身分になることを意味した。

像には個人主義的²¹、打算主義的な思想性が強く表われている。

まず「落蕾」から「山茶花」までに描かれた自由恋愛の実現に関して論じたい。作者が物語の背景とした時代における男女の自由恋愛は当時の台湾社会では厳禁であったことは言うまでもない。だが、リスクを怖れずこの自由恋愛を実践に移したところに作者の描いた新女性像の内面性の強さが示されている。「落蕾」秀英は愛する男性との愛情を育み、あげく妊娠にまで至った女性である。以下は関連箇所引用である。

義山は級で級長だつた。明仲は副級長であつた。当然彼女は義山とは境遇も同じ位だから、身分の違ふ明仲よりも彼女は義山へひそかに心を寄せてゐた。今日迄の発展は盲目的と云へば盲目的で本能的だつた。²²

「盲目的」、「本能的」という非理性的な要素に関しては、秀英自身の社会的立場に対する自覚の欠如が問題であり、自由恋愛そのものに対する否定を意味するものではない。自由恋愛が反社会的、反道徳的であるという見方は封建勢力側が下す価値判断に過ぎず、作者本人は各作品の男性主人公を通じ自由恋愛を肯定する立場にある。ただし、問題となるのが、当時の新女性はたとえ自由恋愛に対する共感を示しても、それを真に理解し実践に移すだけの意志の力が欠如していたことである。そのことが記されたのが作品「芸姐の家」と「山茶花」である。

まず、「芸姐の家」には、公学校卒業生である采雲と秀英の間における会話の一場面が描かれ、「殊に恋愛問題に就いては随分に造詣深くかんじられた²³とある如く、女性二人が特に「恋愛至上主義」に興味を示していることが理解できよう。即ち、このことは世間における新女性一般の自由恋愛をめぐる願望が理論的段階に留まるのみで具体的な実践が伴わなかったことを裏付けているのである。

そして、これら新女性一般（即ち作者がヒロインとして意識しない不特定多数の女性）の実際における自由恋愛へのありかたを描いたのが「山茶花」である。ここでは客

²¹ ここで言うところの個人主義とは当時の封建社会において身分的差別を受けた女性の立場から論じたものである。現在の個人主義に対する一般的見解は、他者の拒絶や排除によって成り立つ利己主義とは異なること、そして自己のみならず他者の人格を尊重せねばならないといったものである。即ち、そこには自分に対するように他人を尊重しなければならないといった厳格さや自己抑制の要求が備わるものである。張文環の作品における新女性像においてはこのような厳格さや自己抑制を欠いた存在として見られるが、作者が封建社会の男尊女卑を認める道徳基準に対して疑問を示している以上、近代化の進む社会における「山茶花」娟、「地方社会」淑ら、女性解放を願う新女性の行為はある程度、個人主義的なものとして認められるものではないかと思われる。

²² 張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、p.20。

²³ 張文環、「芸姐の家」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷[張文環]p.126。

觀的な意味における新女性一般の自由恋愛に対する態度が単に「乗り合いバスの運転手」や、「靴下工場」で編成指導をする「男ぶりのいい」²⁴男性など、いわゆる「都会的なモダンボーイ」²⁵に「秋波を送つてゐる」²⁶程度の、極めてレベルの低いものであることが示されている。こうした様子から、作者は「山茶花」男性主人公(賢)を通じ、当時の新女性一般に対して以下のような非難の意を表している。

教養のない女性は、賢はむしろ昔の習性をそのままに守つてもらつた方が社会の秩序を保つにいいことだと思ふのである。旧思想を新思想にかへてもらふには社会的な環境が要る。それで賢は現代的な女性をみても、古典的な女性をみても氣持がいいものである。一番鼻持ちならぬのは、どつちともつかずに、何んの心の準備もなく、男と手をにぎるのが現代的だと解されてゐる女である。²⁷

引用には当時の公学校で学んだ新女性をして「田舎娘」²⁸とみなす作者の批判が示されている。「山茶花」は新女性の自由恋愛実践に対する賛美が最も顕著となった作品であり、その要因の一つが、ヒロイン娟が引用に示された地方社会における新女性一般とは区別された存在であったからに他ならない。「山茶花」娟の自由恋愛に対する態度は「落蕾」秀英よりも徹底しており、最終的には故郷や家族を捨て、恋人賢の大学留学中である「都会」(東京)への遁走を決意したほどである。作者の作品に於ける新女性に求められた特殊性は、その大胆で豪放な性格を基本に、更にそれが実践力に結び付くかたちで具体化されているというものである。また、このような性格面の特殊性があったからこそ、「落蕾」秀英にせよ「山茶花」娟にせよ当時の新女性一般には見られなかった自由恋愛の実現を果たしたのであり、そして、肝心となるのが、このことが同時に作者の分身である「落蕾」義山や「山茶花」賢といった男性主人公の異性憧憬の実現を意味しているということである。

²⁴ 同注7、p.305。

²⁵ 同注7、p.305。

²⁶ 同注7、p.305。

²⁷ 同注7、p.247。

²⁸ 同注7、p.305。

3.3. 女性の生存をめぐる

かつての新女性像は、男性主人公の主観的な異性願望の対象となることで、自由恋愛の尊重を通じ、「落蕾」と「山茶花」の結末に描かれている如く、結果的に伝統的にも現代的にも生存が許されない進退窮まった状況に陥った。だが、「地方生活」を契機に登場した新たな新女性像である淑の場合、男性主人公との恋愛をめぐるヒロイン的地位を失いながらも、作者の異性憧憬をめぐる人物設定から解放されたことで、新女性像として初めて社会的に適者生存を実現した存在となった。「地方生活」淑の利害結婚における対処と理想的結婚の実現、そして「土の匂ひ」に登場する阿鶯の社会的成功を見た限り、そこには社会的生存と生活基盤確保をめぐる女性としての尊厳の主張、妥協を許さない精神力の強さが見られるが、その根底にあるのが新女性の持つ価値観の一面である打算的、利己的な価値観、そして、それを実現すべく大胆で豪放な性格である。

新たな新女性像はその特殊な性格描写が継続されつつ、その極端な個人主義的側面がより強調された結果、主人公である男性知識人と決別するかたちで、新時代の人材に相応しい生き方を示すことになる。「地方生活」淑が女学校進学を決意した要因たるものが「直接間接に、夫が偉くなると、頭の古い妻をすてる」、「某留學生が糟糠の妻を捨てた。某醫生が許婚者を破談した」²⁹など、男尊女卑を認める封建制度に対する対処があるからであり、また、伝統社会を生活基盤とする以上、封建的結婚は免れることが出来ないと認めた現実認識もあった。かくして淑は反封建的考えを有しながらも、往来のヒロイン像の如く自由恋愛という非現実的な手段は犯さず、それよりも極めて堅実な学歴主義を手段に自己の生活基盤を確保する。淑の考えは「地に這うもの」における老舗大雑貨店の家父陳久旺が自分の一人娘の将来性を考慮して述べた「娘はやはり女学校を出ないと理想的なところへ嫁げない世代になったのはすこし不思議に思った。万が一、女学校へ行けなかったら、家つき娘なら理想に近い婿が見つかるだろう」³⁰という考えに通じるものである。このような無産階級の新女性が高学歴と理想的結婚の双方を実現することは極めて稀であり、作者はその矛盾を補うため作品中に詳

²⁹ 同注9、p.281。

³⁰ 同注17、p.109。

細な説明を施している。³¹ 作者の小説作品において庶民階層の身分で女学校進学を実現した人物は淑が唯一(淑の分身たる「土の匂ひ」阿鶯は女学校の出であるが、出身家庭は不明)となり、そこには娟の「自分はたくみに世のなかをくぐつて行ける」、「自分は大胆で決断力がある」³²といった打算的、利己的な考え方が結果として人物をして社会的な地位を築かせ、将来への活路を開かせた。また、作中において主人公の思惑として示された「これがもし現代の道德であるならば、次に來るべき社會道德はどんなものあるか、澤は想像されるのだつた」³³の一言は、淑が近代化を迎える当時において将来的な生活基盤を確保しうることを暗示したものである。

続く、「土の匂ひ」の阿鶯は淑と同じ部類の人物であり、学歴も同じく女学校卒業³⁴であり、女性知識人としての地位を確保したことが共通する。人物に対する形容に関しては「顔が圓くて、二重まぶたの目はいつも情熱をたたへてるやうに見える。それがいやみではなく、ただ山氣たつぷりなものを感じさせて、金儲けの上手な、隅に置けない女」³⁵という描写がなされ、往來の新女性像の有する性格面、とりわけ淑の如く個人主義的、打算的側面を強く引き継いだ人物であることが分かる。その生存への強い意欲も淑と共通しており、夫と死別され、家族を相手取り遺産相続で勝利し、農産株式会社の社長として敏腕を振るうまでに成り上がった人物として描かれている。

「山茶花」では主人公(賢)が、当時の地方出身の新女性を戒めて「旧思想を新思想にかへてもらふには社会的な環境が要る」³⁶と論じ、それらが伝統社会に不適應な存在だとする見解を示したが、阿鶯の成功はそれまで各作品の作者の分身である男性

31 以下は関連箇所引用である。「澤は公學校を出ると、C市の中學に這入れたので、家庭のことは比較的かへりみない方であつた。しかし、澤が中學を卒へる頃になると、公學校を出た淑は、R部落にかへなければならぬ筈なのに、彼女は同じC市の女学校に這入つた。妙な娘だ、と澤も淑の運命を奇異に感じてゐた。村の公學校の先生は入學期になると、戸籍簿をめぐつて、子供の家を訪ねまはり、新入生を勧誘した。そのために、澤の父は校長の手前上斷り切れないので、淑を楊にも斷らずに公學校に入れてしまつた。喜んだのは淑である。」(a)ここでは一般家庭出身の娘が学校教育を受けることが極めて稀である様子が伺える。また、淑の女学校進学に対しても「自分を犠牲にしても妹を女学校に入れたい」(b)という姉の妹への思いが最終的に女性の学問に反対だった両親を説得したことも大きな原因であつた。「地方生活」からの引用:(a) p.281、(b) p.281。

32 同注7、p.66。

33 同注9、p.308。

34 作品において登場する主人公(清輝)の“姉”はかつては女学校に進学した女性であつたが、家の稼業をめぐる家庭事情により女学校を中途退学する。作品では、阿鶯は「姉と同窓であつた」(a)という記載があり、また「裕福な家」(b)に嫁ぎ婚家を相手取り遺産争いを演じた記載があることから、「地方生活」淑と同様の人物に分類され、同時に、その縁談や結婚における身分的に好条件の一つとなる女性の高学歴取得があつたものと判断される。引用:「土の匂ひ」(a) p.31、(b) p.32。

35 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號(一卷第三號)、1944年7月、p.32。

36 同注9、p.249。

知識人たる主人公が非難し続けたいいわゆる資本主義化の波に乗って成り上がった資本家階級たる大成に等しいものであり、それとは逆に、学問や教育を純粋な人格形成のものだと自覚し、結果的に当時のインテリが活躍すべき場としての「都会」での職探しと立身出世に挫折した二人の男性主人公（「地方生活」、「土の匂ひ」の日本留学帰りの知識人男性）にとっては皮肉な様相を呈している。

4. 新女性像の発展にみられる特殊性

実際に作者の小説作品における伝統的女性に属する結婚適齢期の娘たる人物は被抑圧者として虐げられ社会的な犠牲者になる傾向が強く、「みさを」翠鳳、「闍雞」月里、「山茶花」錦雲など常に男尊社会の犠牲者として不幸で過酷な生活を余儀なくされている。それら伝統的女性の悲劇は、封建制度の矛盾を自覚しながら、それに反抗することなく、依然と無抵抗主義を貫いたことが要因となっている。作者が新女性像に特殊な反伝統的な性格と、個人主義的な思想性を託したのも、新女性の尊厳確保と生活基盤確立における期待があったからだと思われる。

今回とりあげた新女性像が当時の世間一般の新女性とは異なることは既に前述したが、とりわけこれら新女性像は反伝統的要素を濃厚にしており、その性格面においては現実に甘んじることのない意志や精神力の強さが特出している。まず少女時代においては伝統的な男尊社会に対抗する意味でその大胆で反骨的で豪放な性格上の特殊性を示しており、やがて公学校卒業後の適齢期となった娘時代においては一般の新女性には見られない反伝統的で反逆的な生き方を実践するに至る。そして最終的には自己の縁談、結婚、結婚後の生活などをめぐり、儒教への反道徳的行為を手段に自己の生活基盤を固めるといった具合である。

以上、いずれも不合理な封建制度の運命に甘んじることなく、封建伝統や儒教の婦徳観に対する反抗と自己の将来における理想実現に対する強い執着心を示しているのが特徴なのである。

少女時代における新女性像が意識したのが男尊女卑を容認する現実社会への反抗であり、娘時代における新女性像が実践したのが女性解放を実践する上での脱伝統であり、そして最終的に結婚や結婚後の生活を巡りそれら女性が発見したのが男尊社会における女性としての生活基盤の確保である。いずれもそれら新女性の有する強

い精神力がなしかたことであるが、このような作者の創作による新女性像は極めて特殊な存在であり、また社会一般の新女性からかなり特出した人物であることは言うまでもない。以下、作者の描写した新女性の生活基盤確保をめぐる発展的様相を順次説明していきたい。

4.1. 第一段階：男性知識人にとっての理想の異性として

秀英、娟ら人物設定は作者が日本留学をする以前の青年時代に置かれ、作者の新女性に対する異性憧憬が濃厚となり、新女性をして男性の自由恋愛願望を満足させるべきとする作者の人物設定の意図が感じられる。このことが結果的にヒロイン像に悲劇をもたらした要因となったが、その過程には苦境や困難に対処し奮闘する新女性の生き様が示されている。

「落蕾」秀英の場合、結果的には結婚の望めない男性主人公(義山)を見限り、金持ち男性「大雑貨店」との結婚に踏み切ったかたちとなった。主人公(義山)は「彼女はやっぱり普通の女のやうだった」、「思ひ切ったことがやれない」³⁷といった失望が拭えなかった。だが、秀英の立場からすれば、将来の安定した生活の約束が出来ない男性側にこそ根本的、現実的な問題があり、ここに以下の苦言を示すに至る。

あんた、妻と結婚しても又勉強出来るとでも思ふの。もし妻と結婚しても今迄通りに獨學が出来、そして家庭の經濟も立つて行けるなら、妻はどんな苦しいことでも厭わないわ。だけれど出来なかつたらあんた後で、屹度後悔するわよ。勉強が出来ても生活の金は、あんたと妻二人きりなら問題はないですけども、うちの両親と弟は……。³⁸

この主張は「山茶花」娟の如く男性との自由恋愛の実現を意図するものであるが、最終的な秀英の自由恋愛に対する幻滅の所在は男性側の経済力の無さと現実認識の欠如にある。

貴方はもつと勉強したい。金が無くても獨學の積りで行くと、明仲さんに勧められて決心したぢやありませんか。それに反して妻は毎日の生活に肉體的にも精神

³⁷ 同注22、p.20。

³⁸ 同注22、p.15。

的にも、腸を千切られるやうに削られて行くぢやないの。それでも妾にこれ以上、社會に反抗する力を出せと云ふの。兩親や弟を日干しにして……。³⁹

義山には日本留学による立身出世という目的があり、秀英に対し家族や故郷を捨て日本への同行を懇願する。ただし、その考えには現実認識の欠如による独りよがりな面が強く、秀英の置かれた女性たる立場を無視したものとなっている。逆に、秀英の生き方には不合理な封建的婚姻制度に対する反抗精神が依然と示されており、その反封建的な抵抗を持続した果敢な様子は「妾にこれ以上、社會に反抗する力を出せと云ふの」という一言に強く感じられよう。

続く「山茶花」においては、主人公(賢)の公学校就学時代における初恋の相手が貴族階級に属する嬪であったが、階級的、身分的な障壁があり、主人公の愛情に応えることが期待できず、実際のヒロインは無産階級に属する娟となっている。娟がヒロインとなった要因は男性側と同じく無産階級であり、身分的な釣り合いから縁談や結婚の望める条件を満たし、かつ男性側が望む反伝統的な自由恋愛を受け入れられる性格面を有していたからに他ならない。ちなみに「山茶花」嬪は貴族階級出身者であり、主人公男性にとっては身分的に不相応な存在⁴⁰となり、嬪の結婚相手は「隣り村の富豪の子息で公学校の教員をして居る青年」⁴¹となり、身分、家柄ともに釣り合いの取れた人物であった。作者が娟に対して「落蕾」秀英と同じく、その縁談相手として「大雑貨店」の跡取り息子である男性を設けたことは、「落蕾」の主人公男性(義山)と秀英との破局に対する拘りがあったからだと思われる。「山茶花」において縁談に直面した娟は、秀英とは正反対に、主人公(賢)の留学先である日本への遁走を決意する。娟は「昔の女でさへ、計略に落ちた結婚を振り切つて出奔することが出来るのに、現代の私が出来ないとは信じられません」⁴²といった意思表示は、「落蕾」において秀英に「裏切られた」と失望した「落蕾」の主人公(義山)の異性願望に応えたものと思われ、この「山茶

39 同注22、p.17。

40 以下は「山茶花」からの引用である。「賢は自分の恋の対象を何故かいつも田舎娘のやうな気がした。(中略)これは賢の幻想であり、夢であつた。田舎の金持の娘が女学校を出て家で小説に読み更けてあるところへ賢の縁談を持ち込むと云ふ按配である。それが自分の理想な妻になるのだつた。(中略)しかしそんな部落に女学校を出た娘があるだらうか。賢はやつぱり幻滅の悲哀に打たれ、あまりに空想的な自分に恥ずかしさを覚えるのだつた。非現実的希望に一生を誤らせるに違ひないと賢は警戒するのだつた。」(「山茶花」p.244)ここで主人公(賢)が意図する人物は物語において唯一「女学校」を出て「金持ち」に属する女性となる嬪である。

41 同注7、p.294。

42 同注7、「山茶花」p.335。

花」たる作品は処女作「落蕾」において恋愛の敗者となった男性側の異性願望の実現がより理想的に意図された作品として考えられるのである。

4.2.第二段階：伝統社会における女性にとっての理想像として

「山茶花」執筆を以って男性主人公の新女性への異性憧憬に終止符が打たれ、その後の作品における新女性像のほうは作者の異性憧憬をめぐる人物設定から解放されたかたちで、ここに新女性像は実社会での適者生存をめぐり思想面において男性主人公と対立するかたちで、生き方や価値観の異なる道を歩む様相を呈することになる。

作者の戦前の小説作品における公学校教育を受けた新女性像の主要人物は「落蕾」秀英、「山茶花」娟、「地方生活」淑の三者となる(貴族階級出身者である「山茶花」輝の如き人物は除く)が、これら人物の間には性格描写を基点にした社会的な適者生存をめぐる発展論的な様子が現れているのが注目される。まず、秀英の場合では、それが「文學少女」として学識ある知識人、かつ、自由恋愛を実践した女性としての頭角を示しながらも、貧しい家庭を救済すべく結婚後「金持ち」男性との結婚を決意し、最後は相手側から婚約破棄が申し渡され破滅した結果となっている。それに対して、続く「山茶花」娟の場合では、同じく自由恋愛や自由交際に理解を示しながらも、儒教道德の呪縛から逃れられず封建的利害結婚を受け入れた秀英の轍を踏まずに、親から要求された縁談を断固拒絶し、家族を捨てる覚悟で自由恋愛を徹底させようとしたことで、更なる発展と前進がなされている。ただし、結果的に娟にもたらされたのは男性主人公の日本留学開始による関係解消であり、悲劇的ヒロインたる絶望的な結末であった。表面的にはその破局の原因が、娟の持つところの打算的、利己的、個人主義的といった反伝統的な思想性であるとする作者による説明がなされているが、これは男性主人公の立場に立ち、男性主人公を擁護するところの作者本人の主観性を濃厚とするものであり、客観的な見方からすれば、男女の破局の要因は主に男性側の日本留学開始が起因となるものと思われるのである。即ち、女性側が既に結婚適齢期にありながら、男性側のほうはこれから日本留学をしようとする段階にあり、その大学卒業には最低四年は費やすことで、とうてい男性側が結婚を決意することなどできない状況にあったということが考えられるのである。

続く淑の場合は理想の実現を秀英や娟の如く自由恋愛に訴えず、女学校卒業とい

う高学歴取得という手段を以って理想とする結婚生活を実現している。また、その結婚相手が医者になる男性、いわゆる身分や将来性重視の設定から、ここには女性本人の適者生存をめぐる更なる進展が見られる。同時に、このことは「落蕾」や「山茶花」において自己を悲劇に陥れた男性主人公との関係解消と決別を意味するものでもある。

以上、いずれの人物像に対して言えることは、それら新女性が共通した性格的要素を有しながらも、前者から後者になるにつれ利己的、打算的な価値観を有する方向へ発展しており、かつ反伝統的、反動的な性格面における要素を強めながらも、徐々に社会的な生活基盤の確保をめぐる前進がなされているという様相である。

「地方生活」ならびにそれ以後の日本留学帰りの作者の分身たる男性主人公が新女性に対して感じていたのは処女作「落蕾」において男性主人公(義山)が秀英を指摘した「矢張り理智を愛するとともに裕福な生活に対する好奇心を棄て得ないのだ」⁴³という利己的、打算的な思想性であり、実社会の女性の本性に対する客観的な認識である。「山茶花」の終盤部分においても、結婚適齢期になった娟をめぐるこの種の女性の現実的な性格的側面が指摘されており、物語では娟が男性主人公(賢)を恋人にした要因の一つが「村のはじめての大学生である」⁴⁴ことが示され、娟の有する世俗的で功利的である思想性が露呈されているのである。⁴⁵そして「地方生活」淑の場合では、その理想の結婚相手が医学専門学校の学生であるということ、即ち男性の身分的条件が最優先されていることから、女性人物像の持つ利己的、打算的な側面がより際立ったものとなっているのが分かる。

公学校就学における三人のヒロインのうちの最後の一人である「地方生活」淑がかつてのヒロインが有した自由恋愛に絶対的な価値観を置くことなく、女学校進学による高学歴取得を目論んだのは、主に女性の将来を左右する封建的利害結婚に対処することを意図したものであり、結果として淑は医学専門学校の学生(縁談取り決め段階では学生の身分となっただけであるが、作者はこれを卒業が見込まれ将来性が確約された人物として扱っている)との縁談を勝ち取る。その際、作者はこのような新女性の性格的

⁴³ 同注22、p.18。

⁴⁴ 同注9、p.295。

⁴⁵ 実際のところ男性主人公(賢)は文学専攻であることから立身出世とは無縁な身分にあり、娟は短絡的に大学に進学した賢が将来自身に裕福な生活をもたらすと思込んでいるに過ぎない。以下は関連箇所引用である。「自分はこれから大学に行くが、しかし娟が思ふほど光栄でもなく、また出世でもないのである。どう云ふやうな職業が割りあてられるか、これは高の知れてゐることだ。恐らく娟の想像してゐるやうな生活は半分も出来ないことは云ふまでもない。台湾の今までの例をみると、自分が金持でない場合は金持の婿になることである。」(p.295)

特徴を示すべく、物語の結末近くに淑の遺産相続の遣り取りをめぐり一家あげての騒動となる場面を設けている。ここで作者が描き出したのは新女性の特徴たる個人主義的な価値観の徹底と社会的生存への執着心がもたらした反伝統的、反道徳的、反人道的な生き様である。医学専門学校の学生との結婚式を目前とした淑は、将来の嫁ぎ先における更なる生活基盤の確保のために、その嫁入りの際の持参金の確保を目的に、家族や親戚が一堂に集う中、病床の父親に対し「兄さん達は全財産の半分づつ分けること。そして私達姉妹は十分の二で二人で分けることをはつきりと書いてほしいの。でないとならば後でかへつて面倒になるでせう」⁴⁶と、遺産相続の権利を主張する。かくして、淑は家族親戚から親不孝で利己的な娘として痛烈な非難を浴びる。実兄から絶縁を言い渡されながらも、本人はそれに動揺することなく毅然とした態度で二度と実家には戻らない覚悟を決め、その旨を家族一同に伝えるのである。読者の立場からしてみればこの淑に対して利己的で身勝手な反面人物としての印象を受け易いものであるが、張文環は必ずしもこの淑をして物語における反面人物(たとえ作者が反感や嫌悪の念を懐こうが)として描こうという打算はなく、主人公(澤)の口を通じて述べた「生活の確証されてる職業を持つてゐる所へ嫁に行くには、持参金を積んで行かなければ肩はばがせまくなる」⁴⁷、ならびに「自分一個人の仕合せを願ふために、義理人情をも押しなければならぬ、遺産の紛争を、澤はいくつか見た」⁴⁸などの説明から判断し、恐らく作者は男尊女卑を認める封建社会において弱者たる女性が人間的に生きぬくために、かつ不合理な社会制度に対処すべくためにおいて、反伝統的、反道徳的な思想性を持つことはある程度止むを得ないものとして容認していたものと思われる。

「地方生活」淑は、作者の描いた新女性においてはじめて旧式伝統の拘束に屈せず、自力で生活基盤を築いた人物となっている。即ち、作者は近代化の進む台湾地方社会における適者生存に適合する新たな女性の到来を予期していると言えるのである。作品「土の匂ひ」阿鶯は淑の実質上における結婚後のありかたを示した人物である。すでに既婚女性の設定であり、阿鶯が夫の死去の際、婚家に対して「財産は子供の将来の為に必要なのです。子供がゐなければ、私は夫の對年が終れば再婚しますよ」⁴⁹と財産の取り分を要求した場面設定は、「地方生活」における淑の実家に対する

⁴⁶ 同注9、p.306。

⁴⁷ 同注9、p.307。

⁴⁸ 同注9、p.307。

⁴⁹ 同注35、p.32

遺産相続権主張の場面と重なるもので、この阿鶯たる人物像が淑の延長上に設けられたことを意味する。結婚前の娘時代の淑の場合では嫁入りの際の持参金を確保することで結婚後の安泰な生活を実現することが予想され、淑の結婚後の姿として描かれた阿鶯の場合は夫の死に際し遺産相続で獲得した財産を元手に起業し「某農産株式會社」の社長となり「敏碗を振(るう)」⁵⁰までに至る。ここには往來のヒロインと共通する自己の生活基盤を確保せんとする意志の強さ、個人主義に徹底した新女性の精神力の強さが感じられるのである。

淑や阿鶯の封建勢力を相手どった闘争は、男尊女卑を認める封建社会への反抗と対処を兼ねており、それまでになかった女性の社会進出と社会的な独立を成し遂げた新時代に生きる女性としての存在感を示すに十分なものであると思われる。このことは、多少なり当時の知識人タイプの新女性がスローガンとして掲げた婦人解放、男女平等、女性の社会的自立などの実現を意味していると思われる。

5. 結論

新女性像の反伝統的という性格面の特殊性は、最終的には伝統社会から離脱する意味での個人主義的な思想形成の要因となることで落ち着いたと言えよう。そして、作者により新たな新女性像として造詣された「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯の登場には、それまで常に封建社会の敗者や犠牲者として描かれた新女性をはじめ敗者から勝利者に転じたことに新たな意味合いが示されている。この要因となるのが何よりも新女性特有の性格的特徴は言うまでもないが、それよりも「地方生活」、「土の匂ひ」においてはこれら新女性たる人物がある程度のヒロイン的役割を担い、それが男性主人公と密接な関係を示しながらも、以前のような男性主人公の異性憧憬の直接的な相手として設定されていないことが注目されるのである。

「落蕾」から「山茶花」に至る作品における新女性像が迎えた悲劇的運命の所在は、主には作者により男性主人公の異性憧憬の対象として設定されたことにあり、具体的には男性主人公の境遇に理解を示し愛情を懐く存在となるべく施された人物設定に起因するものである。その際、張文環小説作品における書生やインテリタイプとして描

⁵⁰ 同注35、p.30

かれた男性主人公には共通して文学愛好の学生⁵¹が持つところの人道主義的価値観と、無産階級者(或いは没落中の小資産家階級出身者)としての生活力や経済力の欠如、また立身出世が見込めない将来性などの現実問題があり、たとえ高学歴取得が期待されても世間から重宝されることはなく、身分的、経済的のいずれの条件においても結婚はおろか、縁談すらも臨めない状況にあった。裏返せば、そのような境遇が男性主人公をして自由恋愛に対する憧れを懐かせた主な要因となったと言えるのである。だが、いっぽう、既に適齢期にあった新女性のほうは封建伝統に則り縁談と結婚に対処せねばならない、現状への妥協を伴う極めて深刻な問題に直面しており、男性側が新女性の理想として考える都会的、近代的な知識人型の人材となること、及び男性主人公のような立身出世願望やその理想追及を懐くことはどうてい叶うものではなかった。

要するに、作者の小説作品において縁談や結婚の条件を持たない男性主人公の異性憧憬の相手として設定された新女性像の物語における末路が破局や破滅以外の何物でもないことは自然の成り行きに過ぎないのである。

張文環の新女性像においては少女時代の性格描写に始まり、娘時代における主人公との愛憎関係や確執の様相が描かれてきたが、男女の破局が描かれた最終段階、即ち主人公の日本留学への出発と、ヒロインの縁談話が持ち込まれた設定は、ともに男女間の関係の解消と自由恋愛の終焉を意味する。ただし、作者の新女性造詣に対する愛着や執着は依然と残されており、男性主人公の日本の大学卒業後の生活を題材とした「地方生活」と「土の匂ひ」の二作において登場する淑や阿鶯の如きインテリ型の新女性像には、男性主人公が新女性との恋愛と破局で被った痛手の痕跡が見られ、間接的ながら作者の新女性を対象にした主観的な強い愛憎の念が感じられてならない。

また、「土の匂ひ」においては、男性主人公(清輝)の昔の恋人として素美たる人物の登場が見られ、この人物は男性主人公の日本への大学留学を起因とする破局後において、ひとり地元社会に取り残されたかたちで他家の男性に嫁いだ人妻の設定に

⁵¹ 例えば「山茶花」主人公(賢)の場合、「さいはいに高等学校に這入ることが出来た」ものの、それが親戚一同が期待した医学(「医専」)ではなく、文学(「文科」)(「山茶花」、p.241。)であり、賢自身、将来に出世の見込みが持たないことは承知の上であった。(詳細は「地方生活」、p.295を参考されたい)また、「父の要求」主人公(陳有義)にしても、作者の小説作品全てにおいて主人公であり唯一法学部学生として設定されながら、「司法科にパスして弁護士になる」(張文環「父の要求」、『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集第四卷[張文環]』、p.48。)ことに消極的な見解を示し、思想哲学や文学に傾倒して当時の無産階級文学運動に参加した人物となっている。

なっている。清輝は日本留学出発以前において、素美とは恋人関係にあり、「落蕾」、「山茶花」に共通した内容設定から判断し、輝清と素美の破局が男性側の日本留学開始が要因となったことが想像できる。即ち、この物語における素美の人物設定からは、それが「落蕾」の義山と秀英、「山茶花」の賢と娟など男女の破局後の様子として判断されるに十分なものであると言える。破局後、長期間の別離を経てから清輝と素美が再会を果たしたのは清輝が日本の大学を卒業し、帰国後において都会での就職活動に挫折し、そして挫折感を懐きながら生まれ故郷に帰郷してからのことであり、すでに二人の破局後からかなりの長い歳月が過ぎた設定となっている。素美は人妻としての設定であるが、物語には二人が再会する場面が設けられ、その際、男性主人公の内面において青春時代に初恋や自由交際を経験した新女性に対する哀愁や未練の情念が濃く残されている様子が示されている。以下はその引用である。

素美の情熱と理知をたたへてゐる瞳、澄み切つた声、きつと結んだ唇、やさしい過去の想ひ出がどつと一時に、清輝の胸に迫つてきた。⁵²

以上の男性主人公の立場からによる素美に対する描写は、「山茶花」娟に施された「眉や目の秀でてゐる所はきつくは見えるが、大きくうんだ目は優しさをたたへてゐた。綺麗な睫が娟の感情のほとばしりを加減してゐるがやうで、素朴な美しさはやはり人の心をひきつけてゐた」⁵³と同じ性質のものであり、作者の少年時代から青年時代での実生活を通じて感じた異性への思いや執着がじゅうぶんに感じ取れるのである。以下は「土の匂ひ」から関連箇所を引用したものである。

いまは他人の妻であるその恋人が、現在里歸りで村にかへつてきてゐると従妹から聞かされたとき、自分といふ人間は、どこまでも悲劇を地でゆくやうに生まれついてゐるのだと信じざるを得ないのであつた。（中略）途でその女と出合ふ事を恐れながら。一方では、別な感情が、富家に嫁いだ女が、どんなに變つてしまつたか、それを見たい好奇心もあつた。（中略）言ひ知れぬ懐しさと戀しさに胸ををののかせながら清輝は凡ゆる感情を視線にこめて素美の顔にじつとそそぎかけた。けれども、それはまるで石のやうに、何らの反響も見せなかつた。もはや

⁵² 同注35、p.8。

⁵³ 同注7、p.43。

二人は他人になり切ってしまったのだ。⁵⁴

以上の引用には「落蕾」から繰り返され登場した新女性との愛情が実を結ぶことなく終結した男性主人公に共通した悲観、哀愁が感じられる。男性主人公の新女性を対象にした異性憧憬、ならびに新女性との愛憎や確執をめぐる執着や落着に関しては「山茶花」において新女性に対する決別の決意を伴った解決がなされているが、それら男性の少年時代における初恋相手、青年時代における恋人という存在は男性人物にとって、またそれら男性人物を自己の分身とする作者本人の立場からしても忘れがたい重要なものであったと想像されてならない。そして、このことが作者をしてその小説作品においてヒロインとして登場する新女性像をして特殊で限られた人物像に造詣せしめた要因となったと思われる。

⁵⁴ 同注35、p.8。

参考文献

1. テキスト

- 張文環(中島利郎編)『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京:綠蔭書房。1999年7月20日。
- 張文環(中島利郎編)『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。1版東京:綠蔭書房。2002年8月31日。
- 張文環「部落の元老」、『臺灣文藝』第三卷第四・五合併号。1936年4月。台中:臺灣文學奉公會。⁵⁵ p.2~17。
- 張文環『地に這うもの』。1版。東京:現代文化社。1975年9月15日。
- 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』第一卷第三号。1944年7月。台中:臺灣文學奉公會。⁵⁶ p.1~46。
- 張文環『張文環全集』。台中:台中縣立文化中心、2002年3月。

2. 研究論文 (作者五十音順)

- 許惠玟「張文環小説的女性形象分析」、『臺灣文藝』166、167 期合刊本、台北:臺灣文藝雜誌社。1992年。p.11~39。
- 洪郁如『現代台湾女性史 日本の殖民統治と「新女性」の誕生』。東京:勁草書房、2001年11月20日。
- 張文薰『植民地プロレタリア青年の文芸再生:張文環を中心とした「フオルモサ」世代の台湾文学』。東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻修士論文。2005年。
- 張文薰(中島利郎訳)「立身出世を求める青年たち—『風俗小説』張文環新論—」。『日本台湾学会報』第4号。東京:日本台湾学会。2002年7月。p.56~80。
- 陳英仕「張文環『山茶花』析論」。台北:『臺灣文獻』179。2012年3月。
- 津留信代「張文環作品裡的女性觀—日本舊殖民地下的臺灣」。『中國文學評論』復刊第1號、1993年。
- 丁鳳珍『台湾日据時期短篇小説中的女性角色』。成功大学中國文學研究所碩士論文。1996年。
- 中島利雄「張文環作品解説」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京:綠蔭書房。1999年7月20日。p.335~345。
- 柳書琴・陳萬益・中島利郎編「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷[張文環]』。東京:綠蔭書房、1999年7月20日。

⁵⁵ 底本:『新文學雜誌叢書33』(台湾:東方文化書局)所収の復刻本。

⁵⁶ 同注66。